

ダウン症の子 自分らしく



(左から)信田敏宏さんと妻知美さん、長女静香さん。「しーちゃん」は宝物。人を幸せにする力があります(敏宏さん) 東京都上京区

入選の詩でできるまで——成長の物語出版

ダウン症の娘の成長の軌跡を描く「『ホーホー』の詩でできるまで ダウン症児、こころ育ての10年」を、社会人類学者で国立民族学博物館(大阪府吹田市)教授の信田敏宏さん(46)が著した。ダウン症の人がその人らしく生きられるように——そんな願いをこめて。

信田さんが「しーちゃん」と呼ぶ長女静香さん(11)は2003年10月に生まれた。出生後の染色体検査で普通の人より染色体が1本多いダウン症であることがわかった。

体にはいろいろな障害が起きやすい。筋力が弱く成長もゆっくりとしている。「この子は生きていけるのだろうか」「話せないのだろうか」。信田さんと妻知美さん(45)は不安に襲われた。

支えになったのは知美さんの父で画家の大熊峻さんの言葉だ。「この子にはハンディがあるかもしれないけど、どんな素晴らしい人生が待っているかわからへん。悲観したらあかんぞ。

人生は良い方、良い方に考えていかなあかんぞ」しーちゃんを育てるにあたって、信田さん夫妻は二つのことを心がけた。

一つは「言葉」。しーちゃんにたくさん話しかけた。単語の羅列はレドカード。たとえば「新聞」ではなく「新聞をとってきたぞ」と、きちんと文章にして話すように努めた。

一つは「心」。親子で一緒に楽しい、うれしい、面白いなど感動を分かち合えるよう工夫した。しーちゃんが興味を持つ世界の地図、動物、漢字を手作りのすごろくにして一緒に遊んだ。よく自宅近くの京都御苑を

「ホーホー」の詩ができるまで



散歩して、さまざまな鳥の鳴き声を聞いた。しーちゃんは小学4年のとき、生まれて初めての詩「ホーホー」を書いた。

ホーホーとなぎます。パサパサとびます。くらいところにいます。さがしてみてね。きょうのよるまっています。

京都御苑で耳にした「ホーホー」という鳥の声に、しーちゃんは「ふくろうさんだ」と喜んで木々の間を走り回り、大きな木に開いた穴を「ふくろうさん

ダウン症 正式名は「ダウン症候群」。染色体の突然変異によって、800〜1千人に1人の割合で起るといわれる。筋肉の緊張度が低く、知的発達遅れや心臓の疾患を伴うことが多いが、個人差がある。発達はゆっくりだが、豊かな感性や知性を発揮して活躍する人もいる。

「ホーホー」は昨年2月、障害のある人の詩と芸術家らのアートを組み合わせた展覧会「NHKハート展」で、応募した全国4085編から選ばれた50編に入選した。

信田さんは「障害のある子どもの成長はゆっくりかもしれない。でも丁寧に子育てをしていけば、きっと幸せがあると伝えたい」と話す。

出窓社刊。本体1300円。(大村治郎)

2015年(平成27年) 4月14日 火曜日



天気	6	9	12	15	18	21(時)	
水戸	☁	☁	☁	☁	☁	☁	90 15
宇都宮	☁	☁	☁	☁	☁	☁	80 10
前橋	☁	☁	☁	☁	☁	☁	80 15
さいたま	☁	☁	☁	☁	☁	☁	90 13
千葉	☁	☁	☁	☁	☁	☁	80 10
東京	☁	☁	☁	☁	☁	☁	90 14
横浜	☁	☁	☁	☁	☁	☁	80 10
甲府	☁	☁	☁	☁	☁	☁	90 16
静岡	☁	☁	☁	☁	☁	☁	90 16

朝日新聞東京本社 本日の編集長=沢村互
〒104-8011東京都中央区築地5-3-2 電話03-3545-0131 www.asahi.com

ダウン症の娘が書いた詩



「ホーホー」という鳥の声を聞き、小学4年だった娘は初めての詩を書いた。ダウン症の長女の成長を描く物語を、社会人類学者の信田敏宏さんが著した。 27面